

千葉県いすみ市の九十九里ヴィラそとぼうにて開催した。

本年の研究会への参加総数は44名（学部生参加を除くと38名）で、一般講演は27件であった。研究発表の内容としては、視覚、聴覚、嗅覚などの知覚研究を中心に、認知、注意、記憶など幅広い分野の発表が出揃った。本年は一般発表に加え、特別講演として文教大学の椎名 健先生をお招きし、「十分の一秒の認知：読み取りと読み間違い」と題してご講演をいただいた。また、例年とは異なり、若手研究者の専門基礎知識の向上を目的としたチュートリアル講演を企画した。この企画では、千葉大学の矢口博久先生をお招きし、「視覚研究者のための表色の基礎」という題目でご講演をいただいた。

本年の研究会では、忌憚のない活発な議論が行われたとの感想を参加者の方々より多くいただき、当会が参加者の方々にとって有意義なものになったのではないかと感じている。実際、議論の盛り上がりは質疑の時間に限らず、セッション間の休憩時間やナイトセッションまで続いていた。若手研究者や学生にとって、そうした議論は、研究内容そのものだけでなく、研究姿勢や今後の研究テーマなど様々な研究活動について深く考えるきっかけとなったのではないかと考えられる。

本研究会は学生や若手研究者が中心であるため、運営費の一部として助成金を十分に活用させていただいた。本研究会が継続、維持されることによって、知覚・認知だけでなく、心理学全体の活性化につながると考えられる。

③第19回行動数理研究会

開催日：2011年9月20日（木）

開催場所：慶應義塾大学・三田キャンパス 研究室棟

申請責任者：坂上 貴之

研究集会要旨：山岸直基氏（流通経済大）は、過去に変動的行動を強化された履歴を持った場合とそうでない場合とで、後にパーセントailsスケジュールを用いてハトの計数行動の獲得に差が出るかどうかを見た。その結果、変動性を強化された履歴が、計数量の増加を導くことが見出された。Richard W. Malott氏（ウェスタンミシガン大学）の公演は、Everything we know about the Experimental Analysis of Behavior is wrongと題されるもので、実験的行動分析と応用行動分析間に横たわる、両者の接続を難しくしている言葉の用法や現象の捉え方について論じたものであった。なかでも個人制御をめぐる両者の違いに

ついて、フロアからも様々な議論が提起された。正野裕大氏（駒澤大学）は、レスポデント型とオペラント型の随伴性が混在する擬似的条件性弁別課題をヒトとハトで行い、どのような刺激関係が形成可能かを調べた。その結果、ヒトの反応傾向は、見本刺激と比較刺激の対提示による制御と比較刺激選択時の強化随伴性による制御の両者が複合的に影響している可能性が示唆される一方、ハトの場合は比較的刺激的選択時の強化随伴性によってのみ制御されていたことが明らかになった。畑 秀明氏（大阪市立大）は、ハトに囚人のジレンマおよびチキンゲームのゲーム構造を与え、対戦相手の方略（TFTもしくはRND）および社会的文脈（対戦相手がサクラかコンピュータか）で行動が異なるかを見た。その結果、ゲーム構造についてのみ差が見られ、チキンゲームの方でハトは高い協力選択を示した。

今回の研究発表は、いずれも高次レベルでの学習に関するものであった。山岸氏と畑氏は計数行動やゲーム事態での行動をハトで試み、正野氏はヒトとハトを対象としていたが、いずれも随伴性による分析が可能な形で、種を越えた刺激間関係のあり方を見ようとしていた。こうした傾向は、行動の数量的な分析の関心もまた、次第に高次行動の解析へと向かっていることを示唆しているのかもしれない。

④第3回錯視コンテスト授賞式

開催日：2011年12月3日（土）

開催場所：慶應義塾大学・日吉キャンパス（第30回大会懇親会場）

申請責任者：北岡 明佳

研究集会要旨：2009年の第1回錯視コンテスト（北岡，2010）、2010年の第2回錯視コンテスト（北岡，2011）に引き続き、第3回錯視コンテスト（の授賞式）が開催された。日本基礎心理学会から頂いた研究活動助成金は、副賞のデジタルフォトフレーム（上位3作品まで）、印刷経費、郵送費に使用した。授賞式の参加者数は筆者の目算では150名程度で、非会員の受賞者少数も参加した。

作品は電子ファイルの形式で募集した。作品の著作権譲渡を心配する声にあらかじめ配慮して、著作権の取り扱いについて明記した。募集資格には特に制限をけなかつたが、日本基礎心理学会会員からの応募が多かった。応募のあった27作品から、(1)学術性（新しいか）、(2)表現性（わかりやすいか）、(3)美術性（美しいか）の3つの審査基準で得点化した。上位10作品を入賞とし、一番得点の高かつ

た作品をグランプリとした。

グランプリは、早稲田大学の安田 孝氏らの「大隈錯視」であった。この錯視は、写真を少し傾けると、普通の物体はそうのように傾いて見えるのに、人物はそれほど傾いて見えないという現象である。定量的データは添付されておらず、早稲田大学創立者の大隈重信の銅像の写真のみといういわば一発芸である上、授賞式は慶應義塾大学で行われるという気まずさを解消するため、福澤諭吉の肖像を用いた追試結果を筆者が紹介して作品鑑賞会をフォローした。このように運営側が四苦八苦している間、会場では活発な議論がなされたと聞く。

その他の作品の紹介はここでは省略するが、入賞作品はもちろんのこと、入賞に至らなかった作品も大きな潜在的可能性を秘めているものが多く、いわば曲者ぞろいであった。入賞作品は下記ウェブページにまとめて示してあるのでご覧いただきたい。

<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/sakkon/sakkon2011.html>

ちなみに、グランプリと2位の作品は、「小学3年生」・「小学4年生」（小学館）の2月号（2012）に早速紹介された（それぞれp. 25とp. 33）。

引用文献

北岡明佳（2010）. 第1回錯視コンテストの報告 基礎心理学研究, 29, 63-67.

北岡明佳（2011）. 会報 第2回錯視コンテスト 基礎心理学研究, 30, 214-215.

⑤第3回多感覚研究会

開催日・2012年1月18日（水）

開催場所：東京大学・駒場キャンパス 18号館

申請責任者：和田 有史

研究集会要旨：近年、複数の感覚器官からの情報を組み合わせたときに特有に観察される現象に関する研究が盛んに行われており、2011年10月には我が国でもInternational multisensory research Forum（主催：東北大学）が開催されている。このような流れを受けて、本年も多感覚研究者の交流と情報交換の場として第3回多感覚研究会を行った。会場は東京大学駒場キャンパスであった。参加者は87名で、2件のチュートリアル講演と37件のポスター発表が行われた。今年度は諸要因により、開催スケジュールの確定と告知が遅れ、募集期間も大変短かったことを考慮すると、大変盛況であったといえる。チュートリアル講演では、まず大阪大学の前田太郎先生より「錯覚利用の行動支援インタフェース」と

いうタイトルでご講演いただいた。内容としては、人間の感覚・運動・生体情報を計測し同時に各種感覚提示による錯覚を利用して運動の誘導を可能にするウェアラブルインタフェース技術「パラサイトヒューマン」を中心に、様々な錯覚を利用して感覚と運動のメカニズムを解析・利用するデバイス・手法の研究開発についてご紹介いただいた。さらに、産業技術総合研究所の杉田陽一先生には「異種感覚間相互作用の神経基盤について」というタイトルでご講演をいただいた。その中で、感覚情報処理の極めて早期の段階での異種感覚間相互作用が生じていることを示す心理学、生理学、組織学的実験をご紹介いただき、感覚情報統合の発生メカニズムに関する新しい展望をお示しいただいた。ポスター発表でも多様な研究が紹介され、議論が活発になされていた。引き続き開催された懇親会でも多くの参加者が交流し、議論を深めることができた。心理学のみならず、工学、生理学など、多くの分野の研究者の情報交換の場として大変有意義であった。

⑥日本バーチャルリアリティ学会VR心理学研究委員会第19回研究会

開催日：2012年2月4日（土）～5日（日）

開催場所：那覇市IT創造館

申請責任者：北崎 充晃

研究集会要旨：基礎心理学、バーチャルリアリティ、そして聴覚心理学・生理学の融合領域の研究成果発表と討論の場として、VR心理学研究会と日本音響学会聴覚研究会の共催研究会が2012年2月4-5日に那覇市IT創造館で開催された。那覇市IT創造館は、ゆいレールの古島駅あるいはおもろまち駅から徒歩15分の位置にあり、那覇市副都心の一角にある。

研究会では、自己運動知覚、ピッチ知覚、頭部伝達関数による音源定位、顔と声のクロスモーダル情報認知など多岐にわたるテーマが発表され、そのいずれもが基礎心理学を元として、また基礎心理学の発展に貢献する興味深いテーマであった。例えば、氏家悠太、浅井智久、田中章浩、浅川香と若林明雄の研究発表では、健常者の自閉症スペクトラム指数と音声認識における視聴覚相互作用であるマガーク効果の相関を調べており、自閉症傾向の強い被害者ではマガーク効果が生じやすいという結果が報告された。また、寺本涉、古根史雅、坂本修一、行場次朗と鈴木陽一の研究発表は、実際に移動する被験者の音源定位について調べ、音空間が移動時には圧縮